

【研究ノート】

文学批評理論「入門」： 精神分析理論からポストコロニアリズムまで

森 本 奈 理

An Introduction to Literary Theory: From Psychoanalysis to
Postcolonialism

MORIMOTO, Nari

I. はじめに

この研究（授業）ノートは、文教大学文学部英米語英米文学科（以下、「英文科」と記述）の開講科目「英米文学特講Ⅱ」の受講学生のために、文学批評理論をなるだけ易しく解説したものである。この科目を受講するのは、主に英文科の三年生である。使用テキストは筒井康隆の『文学部唯野教授』で、あまたある文学批評理論の概説書のなかからこれを選んだのは、理論の説明が一番分かり易いからである。

ただし、このテキストの難点は、理論の解説が「印象批評」（第1講）から「ポスト構造主義」（第9講）までで終わっていることである。これは、もちろん、この小説のインスピレーションとなったTerry Eagletonの*Literary Theory*（邦題『文学とは何か』）の初版が「ポスト構造主義」までの理論しか扱っていなかったからである。現在の大学では、半期で15回の授業が義務づけられているので、毎回『文学部唯野教授』を「一講」ずつ扱っていくと、第10回で読み終えることになる。（初回授業はガイダンスなので、理論の紹介はしない。）そして、残りの5回で、「精神分析理論」、「新歴史主義」、「カルチュラル・スタディーズ」、「ジェンダー・フェミニズム

ム・クシア理論」、「ポストコロニアリズム」を解説するのだが、これらの理論は『文学部唯野教授』では扱われていないので、適宜、他の批評理論概説書を参照するしかない。

ところが、そうした概説書は「誰にでも分かる」という謳い文句とは裏腹に、文学研究者やその「卵」をメインターゲットにしており、学部学生がそれを読みこなすと想定するのはさすがに無理がある。(巷の概説書の説明は、学部学生が読むには長すぎるのだ。)そこで考えたのは、私自身がこれらの理論をもっと分かり易く、学部学生でも理解できるような言葉でまとめておこう、ということであった。要するに、学部学生と理論の概説書の「橋渡し」になるものをここに書いておこう、ということである。

それでは、早速、「精神分析理論」の解説から始めていきたい。

Ⅱ-1. 精神分析理論

精神分析理論で押さえておくべき人物はシグムンド・フロイト（オーストリア人）である。フランス人のジャック・ラカンという人も有名なのだが、ラカンは「フロイト理論を精読し、それをシステマティックに（「構造主義」的に）まとめ直した」だけの人物なので、初学者はとりあえず無視していい。

フロイト理論の最大のキーワードは「性欲」である。「性欲」こそが人間の本質なのだが、これには長所（生きようとする自己保存の衝動）と短所（自己や他人を破壊しようとする衝動）があるので、その短所をうまく抑えていくことが必要になってくる。

このように、精神分析理論は「個人がいかに社会化されるのか」についてまとめたものである。人間はこの世に生まれたときが一番「変態」なのだが、自分の周りの「社会」の影響を受けながら成長するにつれ、「正常」になっていく。それに伴い、自身の身体の性感帯も変化していく。生まれてすぐの赤ん坊は母親の乳房を口で吸うように、口を性感帯としている。なので、この乳児期を「口唇期」と呼ぶ。そして、この「口唇期」に続くの

が「肛門期」であり、これは「おむつ」をしていた子どもが「おまる」や「トイレ」で排泄する移行期を指している。この時期の人間は肛門を性感帯にしており、排泄物を自分の身体に密着させることで性的快感を得ている。こうした排泄物を、自己の一部として保持するのではなく、異物として外部に放出するように教えられるのが「トイレット・トレーニング」であり、これをクリアすることで、「男根（性器愛）期」という最終形態に到達できる。これは読んで字のごとく、男性器（ペニス）を性感帯として持つ時期のことである。

「人間」の正常状態を「男性」性器で表現するように、フロイトの精神分析理論は男性中心主義である。精神分析理論には、人間の社会化のプロセスを説明する「エディプス・コンプレックス」という仮説があるのだが、やはり、この物語も男性を主人公に据えるのである。

エディプス・コンプレックスは、息子と母、父の三角関係を記述するモデルである。幼い男子は母親との距離が近く、彼女を恋愛の対象にしようとする。ところが、その最愛の女性には、すでに婚姻関係を結んでしまった「もう一人の男性（父）」がいる。当然、息子は父に憎悪を燃やし、父を殺して母と結婚したいと願う。しかし、この時点で、父の腕力は息子をはるかにしのいでおり、父は息子に「母への恋慕をやめなければ、ペニスをちょん切ってしまうぞ」と脅す。最終的に、息子は男らしさのシンボル「ペニス」を失うわけにはいかないと、母をあきらめ、父と和解する。このように、父からの「去勢」の脅しに屈し、母との「近親相姦」をあきらめることで、息子は「正常」な人間へと成長していくのである。

ここまでは2種類の「人間個人の社会化のプロセス」を説明してきたが、このプロセスにおいて何らかのエラーが起これば、それがトラウマとして「無意識」に刻印される。このトラウマは通常、抑圧されており「意識」に上ることはないが、あるきっかけでその封印が破られると、人は精神病を発症したり異常行動をとったりする。（これを「抑圧されたものの回帰」と呼ぶ。）

こう書いてしまうと、正常な人間が幸せで、異常な人間が不幸せなように読めてしまうかもしれないが、必ずしもそうとは言えないところに精神分析理論のニヒリズムが存在する。正常な男性が正常であるのは、母親という最大の「欲望の対象」をあきらめたからで、正常を保ち続ける限りにおいては、「本当に欲しいもの」は絶対に得られない。それが社会で真っ当に生き続ける選択をした人間の「運命」なのである。フロイト理論は「性欲」による「決定論」で、人間は自分自身の「主人」ではなく、「無意識の欲望」に「常にすでに」管理・決定されている「あわれな」存在なのである。

II-2. 新歴史主義

新歴史主義の重要人物は文学研究者のスティーブン・グリーンブラットと歴史(叙述)研究者のヘイドン・ホワイトである。(彼らは共にアメリカ人である。)新歴史主義とは、それまで別々のものとされていた「文学」と「歴史」の垣根を取っ払い、「文学=歴史」という等式を証明したものである。シェークスピアを研究するグリーンブラットは、シェークスピアの「文学」作品も、ただの「歴史」資料だ(「文学の歴史性」と主張し、天才的作家も生まれ落ちた時代の産物でしかないと証明した。一方、歴史の叙述形式を分析したホワイトは、客観的に見える「歴史」も歴史家の「文学」的想像力によって必ず味付けされている(「歴史の文学性」と主張した。現在、歴史の「相対主義」や「修正主義」についての議論が喧しいが、ホワイトの言うように、「歴史的事実」なるものは存在せず、資料の選択・解釈しだいでいくらでも自分に都合のいい「歴史」を書くことができるのである。つまり、主観的でも相対主義的でも修正主義的でもない「歴史」はこれまでに存在したことはなく、これから生まれてくることもない、ということである。

ちなみに、新歴史主義には「新」という語がついているように、ただの「歴史主義」も存在する。¹文学批評理論における「歴史主義」とは、「文

学」作品を解釈する際に、「歴史」を参照枠にすることを意味している。この場合、「歴史」はあくまでも「補助線」であり、メインディッシュは「文学」のほうなので、「文学>歴史」という不等号が成立している。この点において、「歴史主義」と新歴史主義は大きく異なるのである。

この新歴史主義の理論的基礎を提供したのが、ミシェル・フーコーの「言説（英：ディスコース、仏：ディスクール）」概念であった。彼はフロイト理論の「無意識」を応用して、こう述べた。ある特定の時代に生きた人々は、それぞれオリジナルなことを言っていたのではなく、みんな似たり寄ったりのことしか言っていなかったのだ、と。常にすでに、人間は生まれ落ちた社会（特に「言葉」）の影響を受けているので、そこから完全に逸脱するような物言いは絶対にできないのだ。もっとはっきり言えば、同じ時代に生きる人々の発言は、表現に多少の違いはあるにしろ、内容的には全く同じものだ、ということである。

従って、新歴史主義では、新聞・雑誌・広告・流行語などを文学作品と並置して解釈することになる。そうして、その作品が書かれた時代の（無名の）人々の生活を掘り起こすことが新歴史主義の目的である。

II-3. カルチュラル・スタディーズ（マルクス主義批評）

カルチュラル・スタディーズは前項で扱った新歴史主義とそれほど異ならない。私の理解では、カルチュラル・スタディーズとは新歴史主義をもっとラディカルにしたものにすぎない。それなのに、次の授業1回を割いてカルチュラル・スタディーズを扱うのは、ここで「マルクス主義」的文学批評を学生に紹介したかったからである。

カルチュラル・スタディーズで押さえておくべき人物はレイモンド・ウィリアムズである。ウィリアムズはイギリス（正確にはウェールズ）の労働者階級の出身である。アメリカと違い、イギリスは「階級」社会であるが、ウィリアムズはこの階級差を打破するためにマルクス主義を文学批評に応用した。なので、ここではまず、マルクス主義の「階級」論を説明

しておきたい。

人類の歴史は「階級」闘争の歴史である。これがマルクスの主張を一言でまとめたものである。「資本家」というお金持ちは、お金を持たない「労働者」の労働力を安く買い叩いている。これが資本家による労働者の「搾取」である。そして、搾取のあるところでは、資本家はますます裕福に、労働者はますます貧乏になる。このように、社会の上位者と下位者の間にある溝は大きく、両者は常に反目しあっている。この不平等を克服する装置としてマルクスが唱えたのが「プロレタリア革命」であった。これにより、資本家は打倒され、プロレタリア（労働者）による完全に平等な社会運営が行われるようになる（とのことだったが、ソビエト連邦の崩壊のために、プロレタリア革命論は息の根をとめられた）。

このプロレタリア革命論を「文化（カルチャー）」の世界に持ち込んだのがカルチュラル・スタディーズである。文化にも、高尚芸術（ハイ・カルチャー）と大衆文化（キッシュ、サブカルチャー）という「階級」差があるが、両者の間の垣根を取っ払ったのがカルチュラル・スタディーズであった。それまでの文学研究が対象にしていたのは高尚芸術である「純文学」だけだったのだが、映画やテレビアニメ、マンガやロックのような大衆文化も研究対象に含めよう、というのがカルチュラル・スタディーズの主張なのである。（新歴史主義は文学と歴史の間の比較的小さな「垣根」を取っ払うだけだったのだが、カルチュラル・スタディーズは高尚芸術と大衆文化の間の大きな「垣根」を取っ払ってしまった点において、はるかにラディカルな運動だったのである。）

現在、カルチュラル・スタディーズ（文化研究）を行う際の参照枠は「階級 class」、「性差 gender」、「人種 race」の3つだとされている。この項では、その最初の「階級」について、マルクス主義を援用しながら解説した。なので、次の「ジェンダー・フェミニズム・クィア理論」では「性差」という概念を、最後の「ポストコロニアリズム」では「人種」という概念を見ていきたい。

II-4. ジェンダー・フェミニズム・クィア理論

正直に言うと、ジェンダーやフェミニズム、クィアといった「男女の性差」にまつわる理論はほとんど（あるいは、全く）知らない。その大きな理由としては、アメリカ文学研究でフェミニズムが盛んだったのは1980年代で、1990年代以降はポストコロニアリズムが批評の中心を占めてきたことが挙げられる。²（私が大学院で教育を受けたのは2000年代であった。）なので、この項では、特に重要なキーワードを紹介するだけにとどめたい。もちろん、この分野について、私はこれからしっかりと勉強していきたいと思っている。

フェミニズム理論の一番大きな貢献は、人間の社会が男性を優先するように組み立てられていて、女性は「常にすでに」男性によって搾取されている不平等を明るみに出したことである。フェミニズムのモットーに、「個人的なことは政治的なこと」というものがあるが、このモットーは「家庭内暴力」のような女性の苦境を「それぞれの家庭」の問題だと切って捨てるのではなく、同じような苦しみを抱える女性は数多くいるので、「女性全体」の問題だと捉え直し、「政治」的要求に鍛え上げなければならないと主張しているのである。

ここで大切なのは、今や、我々の日常生活において、「政治」と無関係な領域は存在しないということである。どれだけ個人的な振り舞いであっても、それは必ず政治と結び付いているのである。例えば、政治に関わろうとしない「ノンポリ」は、投票をしないという消極的なやり方で現状を肯定しているので、「ノンポリ」ではなく「保守派」なのである。あるいは、極めて個人的な問題に見える「出産」という行為であっても、権力者にとっては「人口」という問題に深く関わっているので、絶対に無視できないことである。（近代以降の）「国民国家体制」下では、「人口」が多ければ多いほど、「兵員」や「労働力」、「税収」が増え、それだけ他国よりも有利な立場になることは言うまでもない。

そして、ジェンダー理論の最大の貢献は、人間の「性」が社会的に構築されていることも明らかにしたことである。日本語の「性」に対応する英語表現には、「セックス sex」と「ジェンダー gender」があるが、これらのうち文学・文化批評の文脈で問題になるのはジェンダーのほうである。セックスが生物学的な「性」、すなわち「オス」、「メス」という基本的には変更不可能なものを意味する一方で、ジェンダーは社会的に構築された「性」、すなわち「男らしさ」、「女らしさ」を意味する。

当然、ジェンダーは政治的な手段を通じて変えていくことができるし、実際、様々なことが変更されてきた。現在38才の男性である私が小学生だった頃、学校に持って行く「ランドセル」の色は男性ならば「黒」、女性ならば「赤」であった。記憶は定かではないが、おそらく、そうするように指定されていたように思う。しかし、よく考えてみると、男性に黒を、女性に赤を割り当てる必然性はどこにも存在しない。おそらく、その当時、赤ではなく黒のランドセルに憧れていた女性もいたはずだ。そして、私には16才離れた妹がいるが、彼女が小学生になる頃には、ランドセルの色指定はなくなっていた。なので、妹は「ピンク」のランドセルを持っていたし、黒のランドセルを持つ女の子も少なくなかった。(もっと分かり易い例としては、学級の出席番号の振り分けがある。かつて、私が小中学生だった頃、まずは男子を50音順に並べ女子はその後に来たが、現在では、男女の区別なく50音順に並べられている。)

このように、ジェンダー理論によれば、ジェンダーを始め人間の「アイデンティティー」は社会的に構築されており、後から変更可能であるということである。「アイデンティティー identity」とは厄介な言葉で、これにぴったりと当てはまる日本語はない。英語では、who I amと言い換えられるので、「(私の) 私らしさ」、「個性」、「属性」などと訳しておけばいいのだろうか。いずれにせよ、アイデンティティーは社会的に構築されており、後から変更可能だと考える人々を「構築主義」者と呼ぶ。反対に、アイデンティティーは生まれつきの産物で、後から変更できないと考える人は「本

質主義」者と呼ばれる。

おそらく、セックスは本質主義的なものだが、ジェンダーは構築主義的なものである。面白いことに、構築主義の立場をとれば、「ヘテロセクシャル（異性愛）」と「ホモセクシャル（同性愛）」の差異も時代の産物であることが見えてくる。同性愛を異性愛と異なるものだと定義づける領域は「クィア理論」と言われるが、この理論によれば、我々が正しいと信じて疑うことのない「異性愛」は、権力者によって「強制された」ものだということである。（この仮説には、「強制的異性愛」という術語がついている。）

古代ギリシアにおいては、同性愛は異性愛よりも「純粋な愛」だとされていた。（古代ギリシアの哲学者は男女間の性的関係を汚らわしいものとしていた。）しかし、近代以降、人口増加を気にする権力者は、それに寄与しない同性愛を「悪」として取り締まるようになったのだ。例えば、イギリスの作家オスカー・ワイルドは同性愛のために1895年に投獄された。ここで注意すべきなのは、近代以降の国家は国民の「性」を管理しようといつても監視していることである。といったところまでが、ジェンダー・フェミニズム・クィア理論の「基礎の基礎」であろうか。

II-5. ポストコロニアリズム（人種理論）

ポストコロニアリズムで押さえておくべき重要人物は、エドワード・サイード（パレスチナ人）、ホミ・バーバ（インド人）、ガヤトリ・スピヴァク（インド人）である。彼らはポストコロニアリズムの「御三家」と評され、全員がアメリカの大学教員である。

その主張は、基本的に（アメリカの）「帝国主義」批判である。アメリカの帝国主義とは、海外に経済的な「植民地」を設定し、その土地の人々を搾取することである。要するに、ポストコロニアリズムはマルクス主義の「人種」バージョンで、欧米の「白人」は常にすでに「有色人種」を搾取していると非難しているのである。

もちろん、(ポストコロニアリズムの理論的基礎を提供した)レイモンド・ウィリアムズの著書*The Country and the City* (邦題『田舎と都会』)のタイトルから分かるように、地理的空間の差異に注目するポストコロニアリズムは、「田舎」と「都会」の格差問題にも応用できる。日本においても、「東京」の一人勝ち状態は加速するいっぽうで、ますます多くの人材やお金が東京に集まってくる。私は奈良県の出身だが、大阪のシンクタンクに勤める友人は「東京には、地方には絶対にいないレベルの人材がごろごろいる」と言い、県庁に勤める友人も「東京にいたら、少子高齢化なんて実感できないだろう」と言う。

それはさておき、ポストコロニアリズムの主要概念を検討していこう。まずはサイドだが、彼の理論のキーワードは「オリエンタリズム」である。オリエンタリズムとは、「東洋」の有色人種に対して「西洋」の白人が抱く「偏見」のことである。西洋人は東洋人を「ありのままに」見ているのではなく、「自分たち西洋人に都合のいいやり方で」見ている、とサイドは主張する。要するに、西洋人は東洋人を「劣等人種」と考えたいので、西洋人が東洋人のことを記述する際には、「野蛮」や「性的放縦」、「未熟」などネガティブな言葉のオンパレードになっている、ということである。というのは、東洋人を劣等人種だと定義すれば、彼らに対する西洋人の植民地支配を正当化できるからである。自分たち西洋人は賢い大人で「石油」のような貴重品の使い方をよく知っているから、未熟な子供の東洋人に代わって、それをきちんと管理しているのだ。これがオリエンタリズムの論理的帰結である。

「オリエンタリズム」の一番分かり易い事例は、9.11の「同時多発テロ」以降のアメリカがイスラム教徒に貼り付けた「レッテル」である。イスラム教徒はみな冷酷な「テロリスト」だ。だから、こちらがやられる前にあいつらをやっつけよう。もちろん、このレッテルは大嘘である。冷酷なテロリストなのはイスラム教徒のごく一部で、その他の大多数のイスラム教徒は我々と変わらない人々なのだ。

サイドの次に登場するのがバーバである。バーバの理論で特筆すべきものは「雑種性 hybridity」だろう。これは人種に関する最大の幻想「純血主義」を打ち破る戦略である。アドルフ・ヒトラーの信念とは違って、純血のアーリア人というのは存在しない。アーリア人だけではなく、日本人にも「純血の日本人」は存在しない。世界中のどの民族を選んできても、彼・彼女らのなかに完全に「純血」の人は1人としていない。我々人間は常にすでに（純血ではなく）雑種であり、純血というのは「人種差別主義者」がでっち上げた「フィクション」なのである。³そして、この人種差別主義者のフィクションを「脱構築」するのがバーバの「雑種性」なのである。

バーバの主張をこう説明されても、未だにピンとこない人もいるだろう。彼の議論は人間の「身体性」、目に見える「身体」を問題にするわりには抽象的で少々分かりにくい。なので、ここではペットの「犬」を具体例に取り挙げよう。日本のペットショップでは、「血統書」付きの犬と雑種の犬が売られている。これらのうちより高値で売買されるのは血統書付きのほうである。日本人はブランド好きなせいも、ペットの犬も雑種より「純血」が好まれるようである。だが、本当のところは、現在この世に存在する犬に「純血」であるものは1匹として存在しない。この世に存在する全ての犬は雑種なのだ。

ペットとして人気のある犬種に「ダックスフンド」というのがある。ダックスフンドは「胴長短足」の特徴的な姿をしている。このダックスフンドも最初から「ダックスフンド」だったわけではない。もともと、この世には様々な身体的特徴を持った様々な雑種しかいなかったのだが、その中から胴長短足の特徴を持つ犬を人為的に選び出し、それらを交配し続けることによって、ダックスフンドという犬種が誕生したのである。だから、血統書付きのダックスフンドも純血などではなく、雑種と雑種を掛け合わせて作られた「雑種」なのである。

あるいは、英文科の学生を「雑種」と呼んでもいいだろう。英文科の学

生は母国語の日本語だけでなく英語もそれなりに使いこなせる。さらに、私の授業も受講している学生は、アメリカの文学や文化についてもそれなりの知識を得るわけなので、日本人でありながらアメリカ人の要素も持ち合わせる。要するに、英文科の学生は日本的なものと同アメリカ的なものをミックスした雑種なのだ。

それでは、最後にスピヴァクを取り挙げることになるが、彼女が問題にしたのは、彼女自身やサイド、バーバのような「植民地の知識人」の立ち位置である。こうした知識人は植民地と本国（宗主国）の「中間」に位置し、植民地の「声」を取りまとめ、宗主国と政治的な交渉を行わなければならない。しかし、彼・彼女ら植民地のエリートが、植民地の「最下層の人々（サバルタン）」の声を正確に代弁できているかという点、残念ながら「できていない」のである。スピヴァクによれば、植民地のエリートとサバルタンの間には「本質」的な違いがあり両者は分かり合えない、ということである。このように、スピヴァクは人間のアイデンティティーに関して「本質主義」の立場をとる。

だが、それでも、植民地のエリートがサバルタンの声を代弁しようとするには大きな意味がある、とスピヴァクは言う。なぜならば、宗主国に直接自分の声を届ける手段をサバルタンは持たないからである。（簡単に言うと、サバルタンは宗主国の言葉を話せない、ということだ。）植民地のエリートは、不完全な形であっても自分がサバルタンの声を代弁できていると信じて政治的な行動を起こさなければならない。本来的には理解不可能な「他者」を理解しようと悪戦苦闘すること。「戦略的本質主義 strategic essentialism」の苦しみを引き受けること。これが知識人の責務なのである。

スピヴァクの理論にも具体例が必要だろう。そこで、戦略的本質主義に当てはまるものとして、「アフーマティヴ・アクション（格差是正措置）」を取り挙げたい。ただ、日本国内では「人種」に関するアフーマティヴ・アクションは説明しにくいので、最近話題になることの多いフェミニズムの事例を紹介したい。今年の9月上旬、安倍晋三首相は「女性役員比率を

3割以上にできた民間企業に対しては優遇措置を講じる」と表明した。（ここでは、首相がスピヴァクの理論「戦略的本質主義」をきちんと理解し、男性役員と女性社員の「橋渡し」もできる人物だと仮定している。）

民間企業において、女性社員はサバルタンであり、最もひどい搾取を受けている。（私は男性でかつ企業就職の経験がないが、企業に就職した同性の友人はみな「総合職の女性は能力を発揮できる場所がなくて本当にかわいそう」と言っていた。）この女性社員の苦境をなんとかしようと、首相は女性役員の登用にインセンティブを付けることに決めた。ただし、この決定をした首相は男性なので、女性社員の本心は分からない。ひょっとすると、女性社員の大多数は出世よりも福利厚生の実を望んでいるのかもしれない。だからといって、首相が何もしなければ現状は全く変わらない。そこで、首相は女性社員の苦境を軽減できそうな政策を実行する。当然、能力を発揮できずに悩んでいた女性社員はやる気を起こすし、「出世ができないから」と企業就職を避けてきた女性も企業の門をくぐるようになるだろう。そして、彼女たちが役員になれば、それだけいっそう女性の声が会社運営に反映されるようになり、「多様」な働き方が可能になるはずだ。⁴

Ⅲ. おわりに

ここまで、『文学部唯野教授』では扱われていないが学生が知っておくべき理論のうち、私が特に重要だと判断したものを5つ紹介してきた。そして、言うまでもなく、Ⅱの本論はプリント教材として「英米文学特講Ⅱ」で配布予定のものである。最後の項目「ポストコロニアリズム」の項がやや長くなったのは、やはり、この理論が学生にとって一番扱いやすいものだと思うからである。「宗主国」と「植民地」、「先進国」と「低開発国」、「都会」と「田舎」という地理的な二項対立は分かり易いし、この二項対立をつきつめれば、世間的な関心の高い「環境保護思想」や「エコ批評」に行きつく。

しかし、文学批評理論が行きついたところが「エコ批評」だとすれば、理

論とはいったい何なのかという問題について考えざるをえない。「エコ」とは往々にして「反科学」である一方、「批評」理論は文学を「科学」的に考察しようとしてきた。「エコ批評って、完全に『オクシモロン』だよなあ。」

しかも、ポストコロニアリズムを始め、現代の批評理論は「ニュークリティシズム」に対する反発を原動力にしてきた。だが、仮想敵とされたニュークリティシズムこそ、エコ思想を根底に胚胎するものではなかったか。ニュークリティシズムの発端はアメリカ北部の工業社会に対するアメリカ南部の「ルサンチマン」だった。南部の農本主義を文学に接ぎ木することで、文学を読む人間はよりよき人間になれるのだ。このニュークリティシズムのイデオロギーはポストコロニアリズムの（隠蔽された）イデオロギーと何ら異なるところがない。

しかし、それでもなお、ニュークリティシズムとポストコロニアリズムは異なるのだ。最も大きな違いは、それぞれの理論を唱えた「知識人」の自己認識である。ジョン・クロウ・ランサムとは異なり、スピヴァクは「植民地（アメリカ南部、インドなど）」の知識人がサバルタンに対して振るっている「暴力」を自覚しているのだ。Eagletonは*Literary Theory*でこう述べている。

Those who work in the field of cultural practices are unlikely to mistake their activity as utterly central. Men and women do not live by culture alone, the vast majority of them throughout history have been deprived of the chance of living by it at all, and those few who are fortunate enough to live by it now are able to do so because of the labour of those who do not. Any cultural or critical theory which does not begin from this most important fact, and hold it steadily in mind in its activities, is in my view unlikely to be worth very much. There is no document of culture which is not also a record of barbarism. (187)

文化研究の分野で仕事をする人びとは、自分たちの活動が文化の中心を占めるなどともや誤解することはあるまい。人間は文化のみに生きるにあらず。大多数の人間はその歴史を通して、文化に接するチャンスすら奪われてきたのであり、そして現在文化的活動を職業としている幸運な少数者たちの生活を保証しているのも、文化に接することのない人びとの労働である。この単純だがもっとも重要な事実から出発し、この事実をその活動のなかで心にとめておかないような文化理論や批評理論は、いかなるものにせよ、私の意見では、存在するに値しない。文化の記録で同時に野蛮の記録でないようなものは決して存在しない。（『文学とは何か（下）』200）

知識人とサバルタンの本質的断絶。ランサムはこのことを意識していなかったが、スピヴァクは意識している。そして、驚くべきことに、とうの昔にヘンリー・ジェイムズは『ボストンの人びと *The Bostonians*』（1886）でこの断絶を指摘していた。だが、その約130年後に次の問いを提出することは無意味では決してない。我々文学教師はオリヴ・チャンセラーに倣うのか、それともバジル・ランサムに倣うのか。答えはチャンセラーだ。

注

人名の表記については、授業で学生に紹介する理論家に限ってカタカナに直した。Terry Eagletonについては、彼の理論は紹介せず、テキストの抜粋を英文解釈の素材としているだけなので、英語表記を使用した。

- 1 「歴史主義」の理論家としては、ヴォルフガング・イーザーの名を挙げておく。彼は文学作品の読者が準拠する枠の一つとして「歴史」を挙げている（筒井 232-33）。
- 2 Donald PeaseとAmy Kaplanが*Cultures of U.S. Imperialism*を出版したのは1992年であった。
- 3 このように、純血はフィクション（虚構）なのだが、一般人にとって、これがフィクションではなく事実に見えるのは「国民国家体制」の仕業であろう。
- 4 アファーマティヴ・アクションは賛否の分かれる政策なので、もう少し掘り下げておこう。まず、企業の女性役員の比率目標を定めることの是非についてだが、従業員100人以上の日本企業において課長以上の役職に就く女性の比率は6.5パーセント

と、明らかに不自然な数値が出ている以上、事態の改善には政府の介入が必要であろう（内閣府 2）。ちなみに、この資料によると、大学専任教員が17.3パーセント、医者が18.1パーセント、弁護士が16.3パーセント、ということである。ただし、大学教員は理工系の女性研究者の数が極端に少ないので、ここのせいで全体の数値が大幅に下げられている可能性が高く、文系の比率はもっと高い。例えば、文教大学の英文科は8/15で、50パーセントを超えている。次に、民間企業の人事に政府が介入することの是非だが、企業も大きくなればなるほど公共と深く関わることになるので、事情によっては、政府の干渉を受けることも仕方がない。（バーバの「雑種性」に従えば、完全にプライベートな会社はこの世に1つとして存在しないのである。）実際、大企業の経営が傾けば救済のために税金が投入されるし、建設会社のように、公共事業を請け負う会社は規模の大小に関わらず、公共部門と持ちつ持たれつである。最後に、こうしたアファーマティヴ・アクションを設けることによって、不利益を被る人も出てくることの是非であるが、これはイデオロギーの問題にすぎない。日本では、Michael Sandelというアメリカ人哲学者が人気なので、彼のような「コミュニタリアン」の主張を紹介しておこう。確かに、「個人」のレベルでは不利益を被る人も出てくるが、「共同体」のレベルでは、そうした不利益を補って余りあるだけの利益が得られる。なぜなら、そうした共同体は「多様性を重んじている」というメッセージを発信することができるからだ。

引用文献

- Eagleton, Terry. *Literary Theory: An Introduction, Anniversary Edition*. Minneapolis: U of Minnesota P, 2008. Print. (イーグルトン, テリー. 『文学とは何か (上)・(下)』. 大橋洋一訳. 東京: 岩波文庫, 2014. Print.)
- 筒井康隆. 『文学部唯野教授』. 東京: 岩波現代文庫, 2000. Print.
- 内閣府・男女共同参画推進連携会議. 「『2020年30%』の実現に向けて」. http://www.gender.go.jp/kaigi/renkei/2020_30/pdf/2020_30_all.pdf. 09.23.2014. Web.